



世界遺産への登録をめざす

武家の古都・鎌倉ニュース

Vol.19

春号 / Spring 2011

第19号 平成23年(2011年)4月発行
発行：鎌倉世界遺産登録推進協議会
編集：広報部会 編集人：内海恒雄

推進協議会有志が文化庁長官を表敬訪問

鎌倉市立第一小学校、第一中学校、県立湘南高校で学び、鎌倉とも縁の深い元ユネスコ大使・前デンマーク大使の近藤誠一さんが平成22年7月、文化庁長官に就任されたことは、われわれ鎌倉市民にとっても心強いニュースでした。そこで鎌倉世界遺産登録推進協議会では内海恒雄・広報部会長をはじめ有志代表6人が同年11月11日、文化庁に近藤長官を表敬訪問しました。

当日は、世界遺産の現状についての1時間にわたる会見に応じて頂きました。長官ともなれば一地域

のことで発言していただくことには限界があるだろうと考え、事前に提出した質問内容は「世界遺産運動で望まれる市民の役割」としておきました。でも実際にはこちらでお聞きしたかった鎌倉の世界遺産の現状についても率直なお考えを示されたことに強い印象を受けました。



世界遺産を語る近藤文化庁長官

近藤長官から鎌倉世界遺産登録に向けてのメッセージ

鎌倉世界遺産登録推進協議会では表敬訪問に合わせた会見で、約1時間にわたって登録の現状について近藤長官のご意見を伺いました。会見には協議会理事の内海恒雄(広報部会長)、福澤健次(鎌倉の世界遺産登録をめざす市民の会事務局長)と卯月文(古都フォーラム代表)、中村公司(古都鎌倉を愛する会代表)、「武家の古都・鎌倉ニュース」編集の佐藤江里子が参加、理事の高木規矩郎が世界遺産運動への市民のかかわりを中心にインタビューし、参加者もそれぞれ質問しました。

近藤長官の発言要旨 1

●市民のかかわり

鎌倉出身ということで、鎌倉の魅力については強く感じています。実際に市民運動がどれくらい盛り上がっているかは、最近まで知る機会はありませんでした。世界遺産に向けた態勢としては市民のかかわりは非常に大事なことです。推薦書を提出してイコモスのミッションが来て調査するときに、どういう保全の状況にあるか、どういう態勢、どういう法律で遺産候補物件を守っていく意思と態勢にあるかということを見るわけです。その時地元の方が、開発を犠牲にしてもどれだけ遺産の価値を守るという決意があるのかどうかということが重要な判断材料になります。

その決意を示すような法律的、制度的、行政的な制度が整っているかどうかまで見ます。平泉が来年再チャレンジするというので、この間イコモスの代表がミッションで来られた時も、かなり細かく保全態勢を見ていったということです。具体的な対応策はもちろん大事ですが、強い意欲とそれが法律や制度に反映されているかということも忘れてはなりません。遺産を持っているところでも開発とか観光に思い切ってシフトしたいので、下手に世界遺産になると制約がかかるとして、むしろ世界遺産をめざさないという判断もあるわけです。

他方、世界遺産をめざすところでは、開発や観光などをある程度犠牲にしてでもちゃんと守るべきで、それが地元の誇りにもつながるし、将来への希望にもつながっていきます。そこで明確な意思が必要になります。今まで知った限りでは鎌倉の市民の活動ぶりは非常に心強いものです。他の国でも程度の差はありますが、一旦世界遺産になりながら市民の心が離れてしまって、開発の方が大事だとしたのがドレスデン(ドイツ)でした。橋を作る作らないで大もめにもめて、住民投票したところ、大勢は橋を作る方になってしまったのです。開発とか農業ということよりも優先して、世界遺産を絶対に守るのだという強い意志が大事になってきているのです。

(会見のつづきは次ページに掲載)

近藤長官の発言要旨 2

近藤長官の発言は、世界遺産委員会の変化などユネスコ大使として現場の空気を体験した人でなければ分かり得ないような細部にわたる内容でした。写真は、文化庁に近藤長官（右端）を表敬訪問した推進協議会のメンバー。

●平泉の調査

平泉が2011年に再チャレンジするのに先立ってイコモスのミッションが訪れ、改善の模様などつぶさにご覧になったようで、消火栓がどこにあるのかまで見ていったとのこと。木造建築なので火事が一番怖い。いざというときにどのような防災措置があるのか。崖崩れなども含めて遺産そのものの自然破壊や景観だけではなく、森林の防火措置、防災措置まで見るのです。

●世界遺産委員会の変貌

世界遺産の件数が増えてきて審査もきびしくなってきました。あら探しと言ったら言葉は悪いけれど、少しでも弱みがあるとそこをついてバツにする傾向があります。その意味で万全の態勢で臨む必要があります。審査するのは書類だけです。登録の判断に先立ってミッションも来ますがたった1人で、しかも主として保全状況を見るだけです。

●世界遺産委員会の内情

世界遺産委員会で1件あたりに費やす時間は、平均すると10分ぐらいです。しっかりとした裏打ちと同時に極めて明確なメッセージが欠かせません。たとえば石見銀山のときの『緑の鉱山』というのは思い付きですが、時代の流れにアピールするメッセージ性があります。本来の世界遺産条約からすればずれているかも知れないが、委員を納得させるテクニックも必要という現実を踏まえてやっていくしかないでしょう。

●保存管理

鎌倉はこれまでのところ多くのお寺や神社などの敷地を選んで、多様なものを集めて提案してこうというコンセプトで来ています。周りを囲んでいる山がお寺や神社と一体となっている環境であり、防衛都市として重要な地形の役割を持っていて、そこにこそ鎌倉の特質があるということのようですが、世界遺産の専門家からみるともう少し整理が必要だということのようです。仮に対象を山全体に広げるとしたら、そこをどのように保存していくのかという考え方の整理をしていかないといけません。

●イコモスの内情

イコモスで特定の案件の審査をする十数人の人はみな本職があります。その合間に担当の推薦書を読まされるため、要約を見て興味を持てなければ本文はざっと見るだけかもしれません。このような審査のやり方が良いとは思えません。2012年秋に世界遺産条約40周

年記念会合を日本でやることもあり、こうした審査の方法の改善策なども今後問題提起していくつもりです。

●評価基準

少し前はたとえば基準の1と2と3で該当するとして推薦すると、全体としてそれなりに説得力があればよかったのです。今は一つ一つ細かく見て、この部分は1と2はいいけれども、3にはちょっと足りないのではないかなど厳しく見るようになりました。6つの基準以外に真実性と完全性（オーセンティシティとインテグリティ）というのがあります。条約に書かれた基準ではないが、資産のすべてがそういう価値の全体を過不足なく示しているかどうかということも見ます。これもかなり厳しくなっています。

●精神性の評価

日本はものそのものではなく、ものの裏にある歴史とか価値観とかストーリーとか人間の精神性といったものが重要であり、ものはそれを代弁しているに過ぎないという考え方が強い。従ってもの自体が新しくなっても裏にある価値観さえ変わらなければ意味を持つ文化だと思います。

●より広く、多様な文化を

審査が厳しい方向になってきたのは、世界遺産の数を増やすと個々の管理がおろそかになるという危惧があり、登録件数をしばっていく傾向があるからです。しかしながら登録件数は先進国に多く、途上国は少ないという現状があります。従って世界中の多様な文化をより広く守り伝えていくため、登録件数が少ない地域からの案件を積極的に登録するという傾向はあるでしょう。

●国際交流

国際交流というとシルクロードと日本人は考えがちですが、これは交流ではなく一方的な流れです。世界遺産で価値づけされるのは双方向の交流なので、日本の遺産がどういった影響を他に与えたかということも議論しなくてはなりません。茶道も禅宗も、中国に始まって日本に来て、中国で途絶えた後、逆流して今では中国でも茶道が盛んになっています。こうした流れを押さえてそれを証明するという姿勢が重要です。あまり欲張らずにコンセプトと対象を思い切って絞った方がいいでしょう。

●対外キャンペーン

日本の専門家、たとえばドナルド・キーンさんのように日本をよく知っておられる外人の方に相談することもあり得るでしょう。

●観光の目玉は文化

これからの観光は歴史とかストーリーを見に来てもらうようになるでしょう。旅行会社のツアーも表面的なものではなくて、文化を知らせるような工夫をするということが大切になってくると思います。文化庁でもいい題材があれば、それについて観光庁と協力してこうというような話はしています。